宮原龍雄から有栖川有栖へ

天草二

探偵小説の楽しみの一つは，なんといっても、最後の場面において、不可能と思われた犯罪が名探偵のあっと驚く名推理によって，見事に瓦解し、驚くべき犯人が指摘されることにあると思います。でも，一体いつ名探偵は，犯罪の解明に気づいたのでしょう。どういう契機が名探偵の上に現れ犯人の正体を知ることになったのでしょうか？残念ながら，ほとんどの作品においては，まさにそのときを書き表すことがありません。なぜでしょう？一つは，快刀乱麻の推理の方が，読者にとって受けがいいのでしょう。また、その瞬間を書くのは，とても難しいと言うことがあるかもしれません。まさにそのときを『発見の一瞬』と言うことにしています。これまで、名探偵に『発見の一瞬』が訪れるまさにそのときのことについていくつか話をしてきました。ここでは、逆になぜそのことがあまり重要視されないのか。宮原龍雄の「3 つの樽」を出発点として，有栖川有栖との個人的な体験を絡ませ，少し気づいたことがありますのでここに記します。

さて、『3 つの樽』は、随分昔に、斜め読みをした記憶があります。複雑な樽の移動に頭がぐるぐる回ってしまったことを覚えています。今回、もう一度、読み直してみて、そのスリリングなストーリーの展開に思わず、引き込まれ、一体どうなるのだろうかと手に汗してしまいました。 感じとしては、どうも、ごまかされたなあ、と言う感想を持っていたようです(自分のことながら、昔に読んでいるので、あまりにあいまいですが)。トリックも、犯人も、すっかり忘れていたので、その解決のうまさに、今は、なかなかなものと、見直しています。

しかし、『発見の一瞬』と言う観点からすれば、解決がいけません。なんと、最終章で、『数日後、真犯人として〇〇〇が捕らえられた。』とあるではありませんか。当時の、枚数制限があることを勘案しても、ちょっと、ひどいです。もちろん、探偵が、何を考えようと、そんなことは、われわれ読者にとって、何の関係もない。きちんと、説明がされればいい。トリックが、きちんとした、整合性を持っていれば、あまり問題にされないと言うことでしょう。ところで，この解決部分への導入は少し形は違っても，今の作品にもよくあることなのです。例えば，鯨統一郎「九つの殺人メルヘン」桜川東子

が、実は、その考え方の中に、専門家の考え方は、素人では、伺え知れないものがある。わかると言うことは、神秘の領域に属していることであって、それには関われないのだと。ということが、なんとなく了解されているように思えます。だから、われわれは、ただ楽しめばいいのだと。神の領域には、踏み込めないのだと。このように考えることは、少し、飛躍しすぎですか？そんなことはないと思います。今と言う時代は、特に、日本では、各人の考え方がとても、大切な時代になっていると思います。旧態依然とした考え方に毒されていてはいけません。江戸時代の庶民の和算に対する取り組みには今の世では、少し考えられないようなもの

があるようです。その好奇心に満ちた庶民の考えには、発見が神の領域に属するなんていう、つまらない狭い考えは少しもありません。それが、明治になり西洋の科学が導入されると和算は捨て去られ、発見は、庶民の手から離れていきました。日本の推理小説において、名探偵の役割は、鮮やかな解決の仕方の提出です。どのような契機が、名探偵に訪れたのかどうかは、どうでもいいことのように扱われていると思います。

宮原龍雄から随分脱線してしまいました。脱線ついでに、もう少し。最近、出版された『本格ミステリ 01』の中の有栖川有栖『紅雨荘殺人事件』を読みました。第 9 節で、火村探偵が、突然事件の解決を宣言します。あまりに突然です。ちょうど、『3 つの樽』と同じ解決に至る道筋です。一体、火村探偵に何が起こったのでしょうか？私たちには、さっぱりわかりません。せっかく面白いストーリー展開なのに、『発見の一瞬』と言う観点では、あまりに唐突な解決で、私たちは、うろたえるばかりです。そういえば、犯人たちも、相当に動揺していました・・・。私が読んでいると、どうしても、劇的な変化があり、それによって、探偵が真理を見つける、そういうことを期待しているのですが、有栖川有栖の作品は、だいたいにおいて、唐突に大団円を迎えます。ところが、有栖川有栖が、発見の一瞬が訪れるまさにその瞬間（ほとんど、その状況を追体験することは不可能なのですが）を、赤裸々に告白しているエッセイを見つけました。新潮社『大密室』の中の『壺中庵殺人事件』のあとがきに、『密室のある風景』を書いています。内容を少し説明すると、SR の例会に出席したところ、犯人当ての余興があり、『雪の足跡トリック』が、出てくる。ちょうど、有栖川有栖が、現在書いている長編のトリックと正面衝突をしたらどうなるのかと言う、まさに手に汗握る状況がかかれている。幸い、衝突することなく、有栖川有栖は、ほっとし、ついでに、犯人当てのトリックも、見事に解決をすると言う内容である。それで、というかもしれませんね。このエッセイは、確かに面白いが、それ以上のものではないと。ところが、実は、その SR の会に私は、参加していたのです。参加したのは、あとにも先にも、この 1 回きりなのですが（もし機会があれば、また参加したいとは思っていますが）したがって、有栖川有栖が、本当に快刀乱麻のように鮮やかに犯人を指名したことを鮮やかに思い出します。私も参加していたから、わかるのですが、紫希岬真緒『初雪の舞う頃』は、ちょっと長めのテキストで、メモをとっていても、そのうち頭がぐるぐるしてきて、試行錯誤に陥り、ぼうとします。解答は、私のグループのチーフが、適当に話をしましたが、ぜんぜんだめでした。まったくわかりませんでした。その中で、有栖川有栖率いるチームは、ほとんどよどみなく解決を話されました。実際、考える時間は、そんなになかったと記憶しています。そして解決編も、ほとんど同じであったと思います。さすが。すごい。の一言です。実は、それで終わっていたのです。このエッセイを読むまでは。ところが、この中で、名探偵の頭の中が少しだけかいまみれます。有栖川有栖は、そのことを少し恥じているような感じで述べています。次のようです。

『あのトリック、推理して見破ったわけでもない。実は、私も同じトリックを高校 2 年のときに書いた小説で使ったことがあっただけなのでした。』

なんだと、思いますか？つまらない！と思いますか。どうも、有栖川有栖も、そのように感じているから、少し恥じたような文章にしているのではないかと思われます。でも、少し想像してみると、朗読を聞きながら、探偵の膨大なデータからその類似に気がつき、高2のときの作品とこの作品を比較検討し、そして、今の作品の中での扱いを注意深く検討し、犯人を特定している様子がわかります。そうすると、まさにわかる一瞬とは、探偵が、過去の作品と、今の作品の類似性に気が付いたまさにその一瞬、有栖川有栖が、ニヤリとする様子がありありと思い浮かぶではありませんか。なるほど、そのような心の動きがあったのか、と思うわけです。でも、類似に気づいた一瞬なんて、文章に書けるわけがありません。小説には、限界があります。でも、このエッセイにより、有栖川有栖が、ある事象と、違うある事象との、類似性に気づき、関連性を考えることによって、解決に至ったということは、わかります。それは、私たちにとって、実は大切な観点なのだと思います。神の神秘の領域ではなく、きちんと説明できる手立てで、解決がなされていることが、わかるからです。そうすると、もしかすると、われわれも、できるかもわかりません。なかなかに難しいのですが。